

ルートセンサス法によるイノシシ出没の モニタリング手法の実証(大熊町)

福島県農業総合センター 浜地域農業再生研究センター

事業名 福島県営農再開支援事業

小事業名 営農再開に向けた作付実証

研究課題名 住民帰還に向けた鳥獣の生息調査(大熊町)

担当者名 小野司

I 実証技術の解説

1 要旨

避難指示区域等では、イノシシ等の出没が懸念されており、住民帰還に向けて、その実態把握が必要とされている。実態把握のためには、出没状況を長期的にモニタリングする必要がある、調査に多くの労力を要する。

そこで、比較的容易なモニタリング手法であるルートセンサス法によってイノシシの出没状況を把握した。

- (1) ルートセンサス法は、予め決めたルートの片側で痕跡のあった①環境、②種類、③数等を記録する手法であり、対象獣種が一様に分布していると思なすことで、地域の生息状況を把握する。また、ルートを固定することで経年的な比較も可能となる。
- (2) ルートセンサス法により、イノシシ出没状況の傾向を把握でき(図1)、簡易なモニタリング手法として期待できる。そのため、イノシシの掘り起こし等の痕跡は、発見が容易なことから、地域住民の参加による実施も可能と考えられる。
- (4) 約 2km のルートセンサス3本での痕跡数とイノシシの行動圏を考慮して約 5km²にランダムに設置した 15 台のセンサーカメラによる撮影頻度の傾向は 7 月、9 月には似た傾向を示した(図2)。また、地上部の餌資源量の増加により掘り返し跡が減ったため、11 月はルートセンサスの痕跡数が減ったと考えられる。

2 期待される効果

- (1) 地域におけるイノシシ出没のモニタリングに貢献できる。

3 活用上の留意点

- (1) 本モニタリング手法は、イノシシ生息の絶対密度を算出するのではなく、相対的な指標とする評価法である。
- (2) 季節変動が大きいため、実施月とルートを定め、年次毎の出没状況をモニタリングすることが有効である。
- (3) イノシシ以外の足跡をカウントしない。

II 具体的データ等

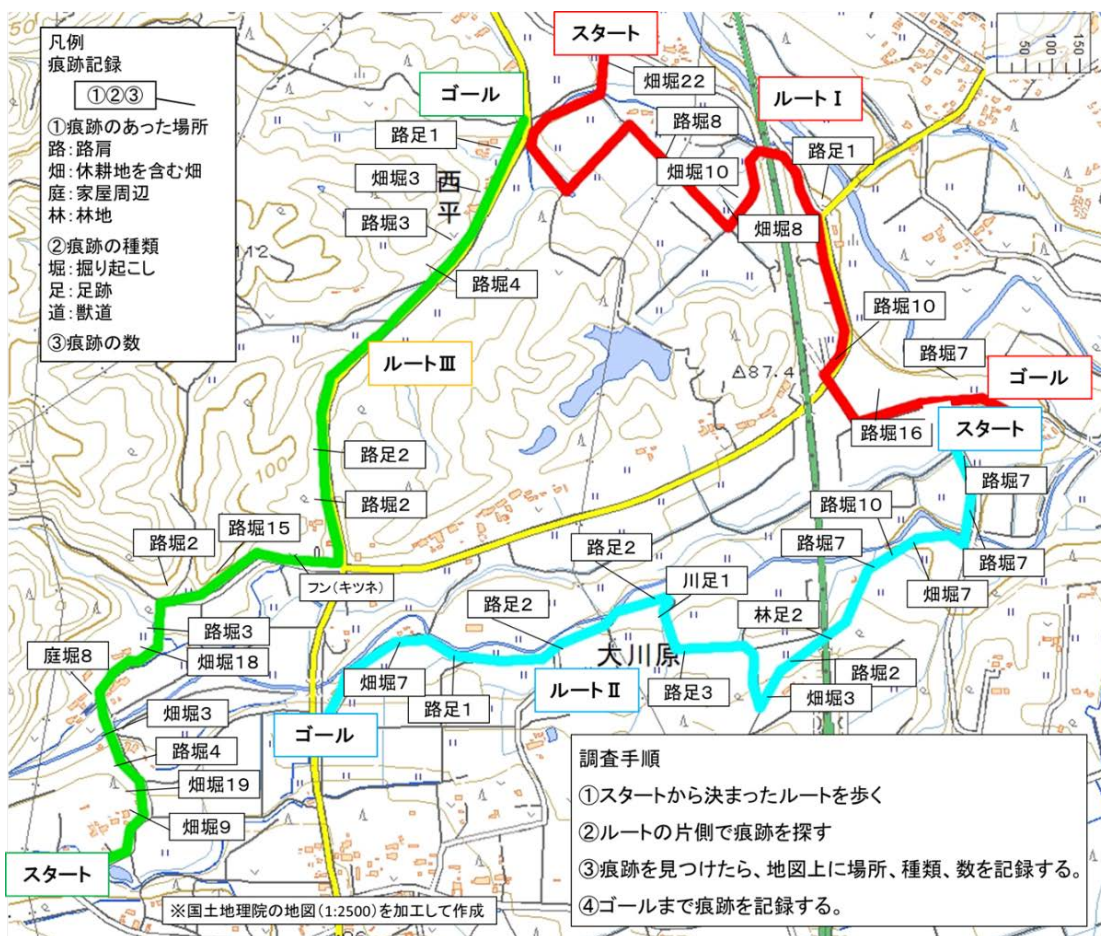


図1 ルートセンサスによる痕跡調査結果(調査日:11月7日)

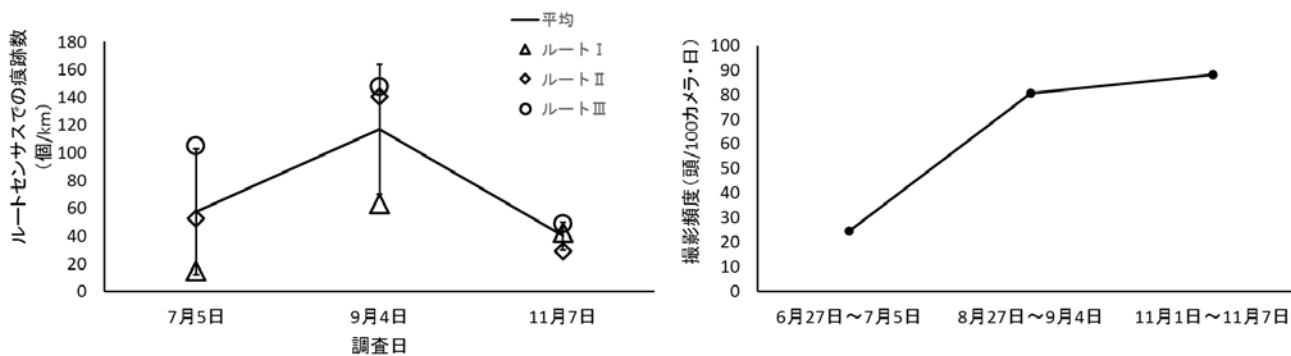


図2 イノシシ出没傾向の比較

(注1) 左: 2km のルートセンサス 3 本での痕跡数の平均(個/km)

(注2) 右: 約 5km²内に設置したセンサーカメラ 15 台によるイノシシの撮影頻度(頭/100カメラ・日)

III その他

- 1 執筆者 小野司
- 2 実施期間 平成 30 年度
- 3 主な参考文献・資料

(1) カメラトラップを用いた密度推定手法のニホンジカ個体群への実用性 第29回日本霊長類学会・日本哺乳類学会
 2013 年度合同大会 P-225